

〔講演要旨〕 明応東海地震(1498)による、駿河湾沿岸の津波被害

東京大学地震研究所 都司 嘉宣

マリン・インパクト 21、焼津市 小網 汪世

§1. はじめに

明応東海地震(明応七年八月二十五日、ユリウス暦1498年9月11日、グレゴリオ暦20日)は、静岡県・三重県をはじめとして千葉県小湊誕生寺(鴨川市)などに津波の被災記録がある。焼津市坂本の林叟院の記録に津波によって二萬六千人が死んだと記されている。この数字は「日本全国の津波死者数」と理解すべきであろう。駿河国・伊豆国に所領のあった京都の公卿・近衛政家(関白太政大臣を務めた)も彼の日記『後法興院記』に「伊勢・参河・駿河・伊豆ニ大波海辺ニ打寄、二三十町之民屋悉溺水、数千人没命」と記している。また焼津の教念寺の伝承が、新庄道雄が天保五年(1834)に完成した『駿河国新風土記』に載せられており、これには「近郷の里民溺死するもの数千人」とあって、後世の宝永(1707)、安政東海(1854)の津波死者数を大きく上回る溺死者が駿河国の沿岸の平野部で生じていたことを記録している。

§2. 伊豆国の明応地震の津波記録

2.1 沼津市西浦江梨の記録 『沼津史談五』に辻真澄(1967)は沼津市西浦江梨の航浦院(臨濟宗)に関する伝承を記した『順礼問答』を翻刻している。この原文は明暦三年(1657)に伝承を文書化した『航浦院縁起』の一部である。「明応七年年八月口五日至未刻津波寄来、如覆天地、依之男女之庶人海底之滓成者不知数。女子老人引汐門外之榎木二本之間ニ打挟、両眼出露命且助ス。然ハ萬行山之薬師竭丹衷祈祷七日之間平癒」と書かれている。この有力者であった鈴木氏の女子が津波によって寺の山門のすぐ外にあった2本の榎木に挟まれ、眼が病気になったが、七日間萬行山航浦院の本尊の薬師如来に祈った結果、眼病が治ったというのである。また、同じ文献に、このとき鈴木氏の先祖書き、家宝を流失したという。これらの記載内容について、江梨・航浦院の現任職・加藤弘道(大信)氏を訪ね、伺ったところ、(1)寺にもこの伝承は伝わっていること、(2)寺は明応年間より100年ほど前に開基して現在まで位置は変わっていないこと、現在の寺の敷地から約2mほど階段を下りたあたりに本来の山門があったが、この山門のすぐ外に榎木があったと見られること、鈴木氏の敷地は現在の西隣の寺である海蔵寺の敷地であったこと、等をご教示いただいた。そこで測量器具を用いて、鈴木氏旧宅に相当すると見られる海蔵寺の床面を測定すると標高10.39mであった。鈴木家の宝物や先祖書はこの床面上50cmにあったとして、

津波浸水高さは10.9m以上であると推定される。すると、航浦院山門外の敷地高9.7mの位置で約1.2mかそれ以上の冠水があったことになり、女子の被災伝説に符合する。いっぽう、女子が祈った航浦院の薬師(秘仏)を納める萬行山の本堂は無事で津波に被災していないと考えられる。その本堂の床面は標高12.6mであって、ここでの津波高は、これ以上ではなかったことになる。

2.2 沼津市戸田の中上・椎木の平目平の伝承

沼津市旧戸田村の中上地区の大川の北岸に椎木という集落があり、ここに平目平という場所があって、昔の津波でここまでヒラメがあがったと伝えられている。今回の調査でこの場所が判明し、36.4mという標高値を得た。明応津波によるものと考えことにする。

2.3 伊豆市小土肥、日蓮宗栄源寺、および八幡宮

小土肥の栄源寺(文明三年1471開基)は明応津波によって小土肥で三十人余が死亡したと伝え、八幡宮は松の木の子にタコが引っかけたと伝承されている。八幡宮の境内敷地は標高15.5m。枝を地上2.5mとみて、ここでの津波高さを18mとする。

2.4 八木沢・妙蔵寺の伝承 山門付近(標高20m)の樹木の先に藻くずが引っかけたと伝えられる。津波高22mと推定する。

2.5 田子神社上梁文 明応地震の五年後文龜三年(1503)の再建を記録している。当時は大田子山崎にあり、その標高は8.2mである。津波高10mとする。

2.6 仁科・佐波神社上梁文 津波は寺川の大堰に達したと記されている。これを測定して9.7mを得た。

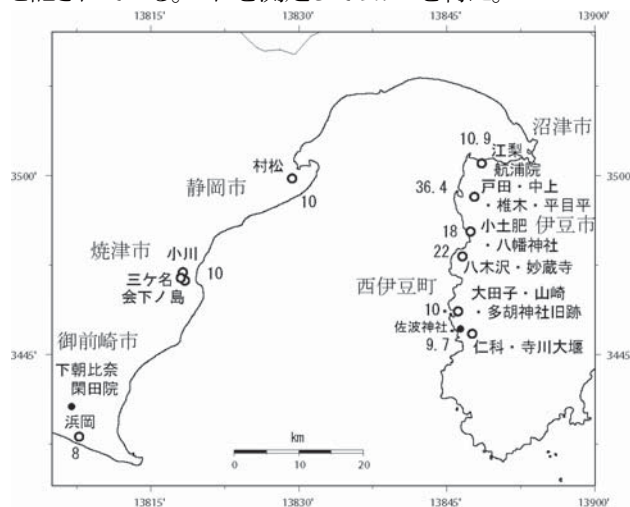


図 明応東海地震(1498)の津波遡上高さ(m)